

『今月の天候と農作業』

通巻第5655号
9月号
令和3年9月2日発行
宮崎県
宮崎地方气象台



【 予報のポイント 】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、高いでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

3～4週目は、高い確率50%です。

<1 週目の予報> 9月4日(土)～ 9月10日(金)

前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

<2 週目の予報> 9月11日(土)～ 9月17日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 9月18日(土)～ 10月1日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

普通作物

◆普通期水稻

1 水管理

根の活力を維持し、登熟を向上させるために、収穫の5日前までは、間断かん水を続けます。ただし、台風時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後は、吹き返しの高温乾燥風による品質低下防止のために、湛水管理を行いましょう。

2 病害虫防除

穂いもちやトビイロウンカの発生に注意します。トビイロウンカについては、カメムシ類との同時防除で、穂揃期とその7～10日後の2回防除を必ず実施しましょう。また、ほ場での発生が多い場合には、臨機防除を行いましょう。

3 収穫

早い地域では中旬頃から収穫作業となります。収穫適期の目安は籾全体の約8割が黄化した頃です。高温での急激な乾燥は、食味や品質が低下するので注意します。玄米水分は仕上げ水分14.6～15.0%を目標に乾燥を行いましょう。

◆大豆

湿害防止のため、ほ場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は紫斑病やカメムシ類の防除を行います。ハスモンヨトウは老齢幼虫になると薬剤の防除効果が劣るので、観察に努め、早めに防除を行いましょう。

◆そば

1 排水対策

そばは湿害に弱く、長時間滞水や冠水すると生育不良や立枯れが発生します。排水溝を設けるとともに、生育期間中も排水を徹底しましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆施設野菜全般

施設野菜ではきゅうり、ピーマン、トマト、いちごなどの定植が始まります。適期に定植し、スムーズに活着させることが最も重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に余裕をもって行いましょう。

かん水管理は、定植の5～7日前にかん水チューブ等を利用し、畦全体が湿るように十分行います。定植直後は活着を促進するため株元を中心に丁寧にかん水します。なお、定植前のかん水量が不足していると根張りが不十分となり、生育や収量に大きく影響しますので、特に中期展張ハウス等、1年を通して天井ビニルが被覆されているほ場では注意が必要です。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培の定植期となりますが、定植後から収穫開始期までの管理により草姿は決まります。根を十分に張らせコンパクトな草姿に仕上げることが、収量、品質向上につながりますので、定植後

は株元中心の手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないよう草勢を調節しましょう。

◆ピーマン

接ぎ木栽培のピーマンは、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向がありますので、台木の特徴を把握して、定植後から収穫開始時期までかん水量を2～3割増やすなど草勢を強めに保つことが必要です。

◆トマト

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期となりますが、セル苗を2次育苗せず、直接定植するダイレクトセル苗定植が増えてきています。この場合、異常茎（メガネ茎）の発生を抑えるために、定植後のかん水量を制限する管理が行われていますが、極端な水切りは初期生育に悪い影響を及ぼしますので、少量のかん水で回数を多く施用するようにします。

◆いちご

「さがほのか」は、花芽分化に対する窒素濃度や苗令の影響等が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃ですので、その2～3日前から花芽検鏡を行い、花芽が分化していることを確認して、9月中旬以降に定植します。

（吉山 健二）

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の播種・定植

9月はほうれんそう、だいこん、水田ごぼう、にんじん等の播種や、キャベツ、はくさい等の定植期です。排水の良い、肥沃なほ場を選び、播種や定植時に適度なかん水を行い、発芽揃いや活着を促進します。生育初期の害虫や雑草対策として粒剤や除草剤の散布が重要ですが、土壌が乾燥するといずれも効果が劣るので、適度なかん水はその対策にもなります。

播種、定植後は、台風等の大雨対策として、明きよを設置しましょう。

◆にんじん

8月に播種したものは間引きの時期です。株間は8cmを目安に、年内出荷分はやや広めにして早期に肥大を良くし、年明け出荷分はやや狭くして株数を増やし、収量アップにつなげましょう。干ばつや高温による発芽不良や大雨による土壌や種子の流失、土壌表面の硬化で欠株が多い場合は、遅くても9月20日頃までにはまきなおしましょう。

◆ほうれんそう

下旬からが播種適期です。大柄に生育させるには、根をしっかり張らせる必要があるため、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。ほうれんそうは他の作物よりも土壌酸度（pH）が高い状態を好むため、土壌診断を行い、pH7を目標に石灰資材を施用します。播種後、土壌が適湿の状態除草剤を散布しましょう。

◆だいこん

9月上旬から下旬を目安に播種し、10月中旬以降に播種する場合はマルチ栽培とします。ハウ素欠乏で黒芯が発生するため、土壌診断を行い、基肥にハウ素入り肥料を施用しましょう。

◆食用かんしょ

普通掘りの収穫期です。生育日数が130日以上になるといもの形や皮色が悪くなるので適期に収穫します。生育中のほ場では、ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等に対して防除効果のある若齢幼虫期を逃さないよう防除を行きましょう。

◆さといも・かんしょ等の収穫後の片付け（次作に向けて）

各種病害を次作で発生させないために、収穫が終わったほ場では、残さを可能な限りほ場外に持ち出し、適正に処理します。持ち出せない残さは耕うんで細かく破碎します。ほ場や水路近くに残さを放棄しないでください。

（川崎 佳栄）

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は着色や糖度などの出荷基準に基づいて行います。また、9月上旬はカメムシの飛来予測時期になりますので、特に台風通過後には注意しましょう。

マルチ栽培や根域制限栽培の園地では、近年、樹勢の低下が目立ちます。収穫後は速やかなマルチ除去や戻しかん水、窒素主体の葉面散布を行い樹勢回復に努めましょう。

◆ 完熟きんかん

今年は梅雨明け後に雨天日が多くなっています。黒点病の防除を徹底しましょう。

9月に入ったら極小果、2果なりを中心に摘果を行います。肥大促進のためにも、9月末までに摘果を終了しましょう。

夜温が早く低下する中山間地域では、10月上旬のビニル被覆の準備を進めましょう。

◆ マンゴー

後期出荷作型園では、剪定直後からたっぷりとかん水を行い、高温管理や葉面散布により新梢の発生や伸長を促進しましょう。

9月になると、日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンは全て開放し、十分な日照を確保しましょう。

2 落葉果樹

◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の生育にも影響を及ぼします。病害防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆ くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。収穫は毎日行い、温度の低い早朝に収穫することで、品温を低く保ち鮮度保持を図ります。出荷前選別を徹底し、害虫による被害果等の混入を防ぎましょう。

3 台風対策

防風ネットの点検や、冠水対策として排水溝の整備を行きましょう。

かんきつ類のかいよう病対策である銅剤の散布は、効果が高い台風襲来前に実施しましょう。

(鈴木 美里)

花 き

◆秋ギク

10月出荷作型の再電照は、総苞りん片形成後期から4日間程度実施します。

なお、栽培地域や気候によって花芽発達の色が異なりますので、事前に必ず花芽検鏡により発達ステージを確認した上で、再電照開始日を決めてください。

◆スイートピー

前半は植え付け作業の最盛期となります。

植え付け後1週間程度は乾燥しないように根締めかん水を行い、その後は根の張りを良くするために徐々にかん水間隔を広げてください。

また、植え付け後10日～2週間は遮熱効果の高い遮光資材で終日遮光し、その後は天候や時間帯に応じて適宜遮光を行いながら、徐々に光を当てる時間を増やすようにしてください。

◆デルフィニウム

沿海地域では年内出荷作型の定植期になります。

高温による早期抽だいを防ぐために、定植前の遮光やかん水によりあらかじめハウス内温度や地温を下げるるとともに、定植後も必要に応じて遮光を行きましょう。

◆トルコギキョウ

沿海地域では年内から年明け出荷作型の定植期になります。

定植直後に土壌の乾燥状態が続くと、ロゼット発生につながったり切り花のボリュームが出なかったりすることから、水管理には十分注意しましょう。

◆キイチゴ

秋出荷向けの腋芽や新芽の伸長が盛んになります。

伸長した枝はすべて収穫せず、樹勢維持並びに来年度に向けた株養成のために3～4本程度は必ず残しましょう。

また、チョウ目害虫の発生の多い時期ですので、引き続き定期的な防除を行きましょう。

◆ホオズキ

ウイルス対策としてほ場の腐熟処理を行う場合は、カーバムナトリウム塩液剤等による古株枯死処理を行ってから株を撤去します。

その後、堆肥や残さ分解資材を投入し、月1回程度の耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理を行うことで、土壌中に残った残さの分解を進めましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

8月7日に、群馬県で豚のCSF（豚熱）の71例目が確認され、野生イノシシにおけるウイルスの感染拡大も継続しています。また、ASF（アフリカ豚熱）や鳥インフルエンザなどの畜産に影響を及ぼす疾病の発生がアジア圏において確認されており、国内への侵入リスクが高まっています。

これらの法定伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策の徹底を図りましょう。

◆家畜

今月は夏から秋への季節の変わり目で、気温の日較差が大きくなる時期です。暑熱の影響による受胎成績の低下もこの時期に出てきますので、暑さで落ちた家畜の体力の回復を図るようにしましょう。昼間は畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かす等、暑熱対策を行います。夜間は急に気温が下がることがありますので、気温差で家畜が体調を崩さないように温度管理を十分に行いましょう。

台風の影響も予想されるため、十分な事前対策が必要となります。

◆飼料作物

台風の影響により収穫が出来ないなどが想定されるため、天候に注意しながら、計画的に収穫作業を行い、良質な粗飼料の確保に努めましょう。また、極早生エンバクの作付時期にもなりますので、計画的な作業を行いましょう。

8月時点においてツマジロクサヨトウが県内各地で確認されています。圃場を確認し、被害が見られる場合は防除しましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

本年も、台風シーズンに入ってきました。これからの台風情報に注意してください。また、これからの作業は、翌年の一番茶収量と品質確保に大変重要です。こまめに茶園を巡回し、作業遅れとならないよう適期に適切な管理を行いましょう。

1 秋肥の施用と土づくり

秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により寒害(幹割れ・冬芽の凍害等)を受けやすくなります。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1～2トンを施用し軽く耕うんを行いましょう。更に、計画的な深耕を行うと発根が促進され、肥効効率向上にもつながります。但し、今年中切り更新した茶園の深耕は控えましょう。また、干ばつが発生している場合も、深耕を控えてください。

2 病害虫の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。網

もち病の多発が予想される際は、四～五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

秋期に多発するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類は、茶園をよく観察し適期防除に努めましょう。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

一 原基づくり

九月から十月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します（原基は二十度前後で最もよくできます）ので、原基の形成促進のため、光の確保に加え、十分な散水を行うなどほだ木の水分補給に努めましょう。

二 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場には、風当たりの少ない暖かい方位（南～東南斜面）の、排水が良く、適度の湿度が確保でき、日光がチラチラ差し込む林内が適しています。散水施設のための水源が確保できれば、なお良いです。

スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い林内を明るくし、光や降雨の入りやすい環境にするとともに、風の強い場所では防風垣を設置するなど環境改善に努めましょう。（堀川 和也）

◆たばこ

今月は、葉たばこ販売に向けての出荷規格の確認と、来年作に向けた準備が主な作業となります。

一 出荷前には必ず異物・異臭・水分の確認と、土砂付着や腐れ等の手入不足がないか、出荷包の最終確認を行いましょう。あわせて販売見込票を作成してください。

また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないかの確認も行い、混入している場合はピッキングを行いましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょう。発生を確認した場合は、速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行って下さい。

確認作業は、晴天日に行い、吸湿による品質低下がないようにしまししょう。

二 良質堆肥十アール当一二〇〇kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しまししょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りまししょう。

三 病害の耕種的防除の徹底を図るためにも夏期耕耘（最低深耕一回・耕耘二回以上）を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めまししょう。

また、土壌改良や肥料設計の参考にするために、土壌検定を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	いもち病（穂）	やや多	いもち病の発生が平年より多くなっています。特に上位葉に葉いもちが多く見られる場合、降雨が続くと穂いもちに進展しやすくなります。ほ場の様子をみながら、発生が多い場合は穂揃期における防除を徹底します。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	紋枯病	やや多	
	トビイロウンカ（秋ウカ）	少	トビイロウンカの発生は、平年より少ない状況ですが、9月の気温が高いと、増殖率が高くなることがあるので、ほ場での発生状況に注意します。
大豆及び野菜類	斑点米カメムシ類	やや多	斑点米カメムシの発生は、平年よりやや多い状況です。被害をうけると等級低下につながりますので、穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底してください。
	ハスモンヨトウ等チョウ目（鱸翅目）害虫	並	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫（アブラムシ類、アザミウマ類、タバココナジラミ類等）	—	アブラムシ類やアザミウマ類およびタバココナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫に対して、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用など、総合的な防除対策に努め徹底防除します。
	キュウリ黄化えそ病（MYSV）	—	本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。発病株は伝染源となりますので、速やかに抜き取ります。
促成いちご	炭疽病	—	苗からの持ち込みによる発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株（半径3ポット）も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみ定植します。
さといも	疫病	—	8月の長雨の影響により、各地で発生が急速に拡大しています。中生および晩生品種では、登録薬剤による定期防除に努めます。
サツマイモ	基腐病	—	発病した残渣は、次年度の伝染源となるため、収穫後の残渣をほ場や周辺に残さないようにしましょう。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類	黒点病	並	かいよう病の発生が平年に比べやや多くなっています。いずれの病害についても、降雨が続く場合は、雨間を利用して、防除適期を逸しないよう散布します。
	かいよう病	やや多	
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	やや少 並	ミカンハダニは、平年よりやや少ない発生です。寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病	並	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。 輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～2葉期に防除を行います。
	輪斑病	並	
	カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノボリガ チャノキアザミウマ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカガラムシ	並 並 並 多 並 並	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノボリガは、先月より発生が多い状況が続いています。9月は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意し防除に努めます。 チャノキアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除が困難です。秋芽の1～2葉期の被害防止に防除の重点をおき、多発時には5～7日間隔で、2回の薬剤散布が必要です。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki>です。

